

## レポートA

私はこのレポートで鳥取の水産業が抱える問題と、その解決策を挙げる。

日本では年々と魚介類の生産量が低下しており、鳥取県も例外ではない。

鳥取県はカニの水揚げ量が全国一位である。現代人の魚ばなれが起きている今、食用以外にもカニに価値を見出すことが重要である。鳥取大学でも研究が進められているように。殻に含まれる成分から商品をつくるなど、鳥取のカニブランドをより生かしていくことがよいと考える。

魚介類の生産量が減少してしまったことには現代人の魚ばなれなど多くの理由があるが、結局は乱獲・無秩序な資源管理が原因である。漁期の設定、規定のサイズより小さい個体は逃がすなどの漁獲制限を強化することが解決につながると考える。

生産量の低下に対し、養殖で抑えるという動きがある。現代では養殖の技術が進歩しており、クロマグロなどの魚類でも完全養殖ができるほどである。養殖をするにはコストが大きく事業化するには難しいため、いかにコストを低くするかがこれからの課題である。

鳥取だけでなく、日本全体に見ても食用魚介類の自給率は低下している。低下している理由として、主に近年は漁業に関する国際的な規制が多くなったことが挙げられる。自由に漁業が行える海域が狭まり、遠洋漁業は衰退してしまった。また生産量が低下しても消費者の需要は減少方向とはいえやや横ばいであるため、その需要ギャップが生じる。そこで外国産の輸入で差を埋める必要が出てきた。最近の自給率は60%前後となっている。

日本の水産業が抱える問題として、さらに漁業就業者の高齢化がある。生産量の低下により職としての安定性がなくなってきたために就業する若者が減少しているのが原因である。現在では従業者の約半数が60歳以上である。将来性のある産業に変わらない限り、高齢化は食い止められないと考える。

まとめると、鳥取の水揚げ量を増やすには養殖産業を普及させることと、鳥取の生産物であるカニを様々な方法でプロデュースすることが重要である。

## レポートB

本レポートは、鳥取県の水産物ブランドや水産業、海洋資源についての概要と課題について述べることを目的とする。

鳥取県の水産物ブランドの1つにズワイガニがある。日本各地でズワイガニのブランド化が進む中、鳥取県では最上級のズワイガニを、トップブランド「五輝星」として販売している。トップブランドを作ることで、鳥取県のカニのPRに加え、他ブランドとの差別化を図っているのである。他にも、ズワイガニ漁の維持・発展のために、ズワイガニの資源管理が行われている。また、鳥取県で水揚げされたカニの大半を占めるベニズワイガニは、多くが加工品として売られている。鳥取県の工業生産の出荷額は食料品が最も多いのだが、そのうち32%が水産加工物である。つまり、第2次産業においても、水産業は重要だといえるのである。

境港では、夏にクロマグロが水揚げされる。クロマグロを漁獲する大中型まき網漁業では、クロマグロの他に、イワシやアジなどがとられ、これらは食料品、化粧品として加工されている。全国主要水揚量を見ると、境港は5番目に多く、島根半島によって北風が遮られた良い環境下にある日本海随一の港である。

以上のように、鳥取県には優れた水産物ブランドや漁港があるが、水産業の課題も抱えている。高齢化による漁業就業者数の減少や、漁船漁業生産量の減少、食料魚介類の自給率の低下などがその例であるが、これらは日本の水産業の課題にもなっている。この課題解決の一助となっているのが銀鮭養殖事業である。鳥取県の銀鮭養殖企業の弓ヶ浜水産は、養殖にあたって、無駄な人件費を削減し、生産性を高める方向性をとっている。

また、鳥取沖には海洋資源メタンハイドレートが分布しており、注目を集めている。

鳥取の水産業の課題解決に向けて、まずは鳥取県民に県の水産物の魅力を知ってもらうということが必要だと私は考える。特産品、給食のメニューなどで水産物を知ってもらうことにより、水産物の需要の拡大、課題解決の意識向上につながるのではないかと考えた。